

蓮田善明 戦争と文学 目次

序 章	いまだ「解禁」されざるもののために——保田與重郎と三島由紀夫と蓮田善明	5
第一章	文学者の戦争——玉井伍長（火野葦平）と蓮田少尉	16
第二章	教育者・蓮田善明の「転向」 付・二つの宣長論と二つの公定思想	35
第三章	文学（一） 詩、短歌、俳句——趣味の自己統制	53
第四章	文学（二） 古典論——大津皇子へ 付・キルケゴールと保田與重郎	73
第五章	内務班 帝国軍隊の理念と現実 付・杉本少佐と村上少尉	93
第六章	戦地（一） 聖戦の「詩と真実」	106
第七章	戦地（二） 「山上記」または美と崇高と不気味なもの	124
第八章	戦地（三） 「詩の山」の『古今集』、または古典主義と浪漫主義	142
第九章	戦地（四） 晏家大山と伊東静雄「わがひとに与ふる哀歌」	158

第十章 戦地（五） 晏家大山または山巔のニーチェ 176

第十一章 戦地（六） 詩と小説の弁または戦場のポスト・モダン 197

第十二章 文学（三） 表象の危機から小説『有心』へ 215

第十三章 文学（四） 小説『有心』と『鴨長明』、または詩と隠遁 230

第十四章 文学（五） 小説『有心』——生の方へ、温かいものの方へ 243

第十五章 文学（六） 『有心』の三層構造——冷たいもの／温かいもの／熱いもの 255

第十六章 文学（七） 謎解き『有心』——再び「死」詩の方へ 267

第十七章 文学（八） 「文藝文化」と危機の国学 付・三島由紀夫と保田與重郎 278

終章 最期の蓮田善明——非転向者の銃口 301

あとがき 315

蓮田善明年譜 317

序 章 いまだ「解禁」されざるもののために

——保田與重郎と三島由紀夫と蓮田善明

保田與重郎の解禁

「今日保田與重郎の名は、あたかも海中深く廃棄された放射性物質のごとくに語られている」と大岡信が「保田與重郎ノート」に書いたのは昭和三十三年（一九五八）年のことだった。

死を撒き散らす「放射性物質」とはなんともすさまじい比喩だが、むしろ、「美」と「文化」を語りながら軍国主義やウルトラ・ナシヨナリズムの巨大な破壊力と結びついてしまった保田の国粹的ロマン主義の危険性を指している。「文学的」に言い直せば、戦時下の若者たちを美学的な「死（＝詩）」へと誘惑しつづけた保田の文業のおそるべき呪力を指している。「それはたしかに廃棄された。だが、動かぬものと思われていた深海水は、実際には少しずつつ動いていた。放射能はやがて思いもよらぬ岸辺まで行き渡るかもしれぬ……」と大岡はつづけていた。

その八年後の昭和四十一年（一九六六）年、川村二郎は「保田與重郎論」をこう書き出した。

今日、少なくとも現象的には、保田與重郎は論壇の一角に復活したかのようにみえる。彼の名を口にするさえタブーの観があった戦後の一時期から考えれば、ほとんど隔世の感がある。その名の五つの文字に、一種神秘的な劫罰を受けた癩患者を目にするような戦慄を味わうことは、現在ではもはや誰にとっても不

可能であろう。

「一種神秘的な劫罰を受けた癩患者」もまた、「放射性物質」に勝るとも劣らぬまがましい比喩だ。しかし、大岡においてなおも現在形で語られていたその比喩は、川村においてはすでに過去のものとして語られている。保田與重郎という「禁忌」はこの八年間に、つまりはほぼ一九六〇年代前半に、解除されたのである。

もちろん、社会的背景としては、いわゆる高度経済成長による戦後大衆社会の実現があった。戦争と敗戦のなまなましい傷口はようやく癒え始め、それに伴って、無自覚のうちに被害感情や復讐心を抱え込んで硬直していたイデオロギー的言論もようやく鎮まり始めた。また、六〇年反安保闘争の昂揚と挫折を契機に「革命」幻想は急速に凋み、敗戦当初は現実変革の理念だった「個人主義」や「自由主義」も、私益優先、私生活優先という大衆の生活感覚の中に籠絡されていった。そのとき「民主主義」も多数者の欲望が支配する「欲望民主主義」のごときものとなる。それは頹落だが、原理主義の土壌のないこの国では、理念や理想は頹落することでは生活化されないのだ。

ともあれこうして、戦争と敗戦の記憶に距離を介して向き合えるだけの心理的ゆとりが社会に生じたのである。

文学・思想の領域で保田與重郎と日本ロマン派を検討対象として「解禁」するに最も功績があったのは、川村二郎も言及しているとおり、橋川文三の『日本浪漫派批判序説』だった。大岡信の「保田与重郎ノート」が発表される一年前、一九五七年から目立たぬ雑誌に連載を始め、一九六〇年の初めに刊行されたこの書物は、主としてカール・シュミットの『政治的ロマン主義』を参照しながらも、「私たちにとって、日本ロマン派とは保田与重郎以外のものではなかった」と断言していた通り、その核心部は、保田の文章に強く魅惑された

「純粹戦中世代」たる自身の体験を剔抉し尽くそうとする内的モチーフで貫かれていた。

つまりそれは、左翼の公式主義的イデオロギー批判から最も遠く、かつ、十歳近く年長の丸山真男や荒正人などによる近代主義的な立場からの外在批評とも異なる、内在批評として展開されていた。いわば戦時下の青年たちの「生きられたナシヨナリズム体験」「生きられた日本ロマン派体験」の内省的分析が、ここに表現を獲得したのである。

橋川の仕事は、同じく「純粹戦中世代」として早くから自己体験の内省を通じて既成左翼批判や独自のナシヨナリズム分析を展開していた吉本隆明の仕事とも結びつき、さらに反安保闘争が反米ナシヨナリズムという一面を孕んでいたことも関わって、ナシヨナリズム再検討の舞台を作った。保田與重郎もそういう文脈の中に位置づけられていく。

以後、文芸批評の場では、桶谷秀昭、磯田光一、江藤淳らが、それぞれの立場と流儀で、文学とナシヨナリズムの問題を近代日本史の総体の中で検討していくことになる。彼らは、大岡信や川村二郎も含めて、ひとしく橋川文三よりさらに十歳ほど年少の、満州事変（昭和六（一九三二）年）前後に生れた批評家たちだった。

彼らのはるか後塵を拝する私も、「イロニーと『女』」と題して私なりの保田與重郎論（『批評の誕生／批評の死』所収）を書き、また講談社文芸文庫版『日本浪漫派批判序説』の解説なども書いた。日本の大衆社会が過飽和に達し、遊戯感覚の中ですべてが「解禁」されたかに見えた二十世紀の終りごろのことだった。世に保田與重郎論は数多い。たしかに保田與重郎は「解禁」されて久しいのである。

蓮田善明と三島由紀夫

ところで、『日本浪漫派批判序説』にはこんな一節もあった。

ナチズムのニヒリズムは、「我々は闘わねばならぬ！」^{ヴイアー・ミユッセン・ケンベン}という呪われた無窮動にあらわれるが、しかし、私たちの感じとつた日本ロマン派は、まさに「私たちは死なねばならぬ！」^{ヴイアー・ミユッセン・シュテルベン}という以外のものではなかった。

だが、保田與重郎自身が「私たちは死なねばならぬ」と書いたのではなかった。それはあくまで、日中戦争開始時（一九三七年）に十五歳の少年だった橋川文三が、また彼の同年代の友人たちが、「支那事変」から「大東亜戦争」へと大規模な近代戦が拡大する中で、いっさいの功利を排して反近代、反英米の国学的発想を徹底純化していく保田の文章がアイロニカルに指し示すその果ての果てに、幻聴のように聴いた民族の没落破滅への誘惑の声にほかならなかった。

むしろ、戦争のさなか、「私たちは死なねばならぬ」ときっぱりと言挙げしたのは、保田與重郎ではなく、蓮田善明だった。

予はかかる時代の人は若くして死なねばならないのではないかと思ふ。……然うして死ぬことが今日の自分の文化だと知つてゐる。

雑誌「文藝文化」の昭和十三（一九三八）年十一月号に発表した蓮田善明の「青春の詩宗——大津皇子論」の末尾近い一節である。私はこれを、三島由紀夫が小高根二郎の評伝『蓮田善明とその死』（一九七〇年）に寄せた序文に引いたとおりに引いた。（単行本『神韻の文学』所収の本文は少し異なる。）

蓮田は三島のデビュー作「花ざかりの森」の初回（四回に分けて分載）が掲載された「文藝文化」昭和十六年九月号の後記に、「この年少の作者は、併し悠久な日本の歴史の請し子である。我々より歳は遙に少いがすでに成熟したものの誕生である」と熱烈な推輓の辞を述べ、「全く我々の中から生れたものであることを直ぐ覺つた」（傍点原文）と文学の血脈を共有して「生れた」正統な嫡出子であることを公然と認知表明していた。

このとき蓮田善明三十五歳、三島由紀夫十六歳。三島の学習院中等科での師は「文藝文化」同人の清水文雄だったが、この逸早い嫡出認知宣言によって、蓮田は三島の精神的な「父」にして「師」になったのだ、といってもよい。とりわけ、以下に述べるように、死に方のモデルを提供して三島の最晩年を「自決」に向けて導いたという意味では、蓮田善明こそは三島由紀夫の最大にして最終の「師」であつたとさえいえるだろう。

三島はかつて、昭和二十一年十一月十七日、蓮田の勤務校だった成城学園の素心寮で開かれた「蓮田善明を偲ぶ会」に出席し、その記念誌「おもかげ」のために次の詞を揮毫していた。「古代の雲を愛でし君はその身に古代を現じて雲隠れ玉ひしに われ近代に遺されて空しく靉靄の雲を慕ひその身は漠々たる塵土に埋れんとす」。そしていま、『蓮田善明とその死』への序文で、三島は「青春の詩宗——大津皇子論」からの引用に続くこう記す。

この蓮田氏の書いた数行は、今も私の心にこびりついて離れない。死ぬことが文化だ、といふ考への、或る時代の青年の心を襲つた稲妻のやうな美しさから、今日なほ私のがれることができないのは、多分、自分がそのやうにして「文化」を創る人間になり得なかつたといふ千年の憾みに拠る。

「死ぬことが今日の自分の文化だと知つてゐる」と蓮田が書いたのは、あくまで古代の転形期を生きた大津皇

子の自覚である。それを三島は、蓮田自身の自覚、ひいては十五年戦争下の青年のもつべき自覚であったかのように受け止めている。しかし、それが三島の強引な読み変えだというわけではない。たしかに蓮田自身にもその自覚はあった。先ほどの大津皇子論からの引用部で三島が「……」と省略した箇所、蓮田はこう書いていた。

新しい時代を表明するためには若くして死ぬ——我々の明治の若い詩人たちを想ひたい。それは世代の戦ひである。かういふ若い死によつて新しい世代は斃れるのでなく却つて新しい時代をその墓標の上に立てるのである。

若き世代の戦い斃れた墓標の上に「新しい時代」が樹立される。それはこの国の文化の歴史において、幾度も反復されてきた「世代の戦ひ」なのだ、と蓮田はいう。そして、「明治の若い詩人たち」（おそらくその中心には北村透谷がいる）のそのさらに後裔として、古典研究を通じて日本の「詩」の伝統を新たによみがえらせたい、とは昭和のロマン主義者・蓮田善明の希いであった。それなら、蓮田はたしかに、大津皇子に自分自身を重ねているのである。

大津皇子論を載せた「文藝文化」の奥付が記す発行日は昭和十三年十一月一日だが、蓮田はその直前に召集令状を受け取り、十月二十日に故郷熊本歩兵第十三連隊に入営した。蓮田は昭和三年に広島高等師範学校を卒業した後、幹部候補生として十カ月間の入隊経験を持っていたから、ただの兵卒ではなく、陸軍歩兵少尉としての入隊である。すでに日中戦争開始から一年、応召近し、の覚悟はあらかじめ蓮田にあった。持統天皇（厳密には即位以前だが）の命を受けて懲憑として死に就いた大津皇子のように、蓮田もまた昭和の天皇の命を

受けて死に就くのである。「死ぬことが今日の自分の文化だと知つてゐる」はその覚悟の中で記された一行である。

中支戦線に派遣された蓮田は負傷して昭和十五年十月に帰還するが、昭和十八年十月、再度の召集を受けて南方戦線に赴き、シンガポールの北、ジョホールバルで敗戦を迎える。そして、その四日後の昭和二十年八月十九日、上官である連隊長を射殺して自殺した。享年四十一歳（満年齢）だった。

一方、三島由紀夫は、自分の序文を巻頭に掲げた『蓮田善明とその死』が刊行されたその八カ月後、昭和四十五（一九七〇）年十一月二十五日、まるで「千年の憾み」を遅れて晴らすかのごとく、あるいは、師・蓮田善明の壮烈な自殺を新たな意匠で反復するかのごとく、自決することになる。

禁忌としての「その死」と「ますらをぶり」の文学

蓮田を含めた「文藝文化」同人たちは保田與重郎の文学論に触発されるところが多かつたし、保田との親密な交流もあった。保田は「文藝文化」に何度も寄稿している。

その保田與重郎は半世紀も前に自由な批評検討へと「解禁」されたが、保田の近傍にいて保田以上に「危険」な存在であつたかも知れない蓮田善明は、しかし、比喩ならぬ現実の「放射性物質」を海中に垂れ流し続けている二十一世紀の日本にあつても、いまだ「解禁」されていないように見える。

現に、管見の限りでいうのだが、蓮田善明論はほとんど書かれていない。単行本としては、小高根二郎の『蓮田善明とその死』を別格とすれば、松本健一の『蓮田善明 日本伝説』（一九九〇年）だけだろう。だが、前者は評伝、後者は前者に対する疑義の提出であつて、どちらも文芸批評とは言いにくい。蓮田善明を単独で論じた雑誌論文などもまず見当たらない。蓮田善明の名前はただ保田與重郎や三島由紀夫を論じる中で付随的に

言及されるばかりだ。蓮田の文章を「文学」として論じたものは皆無といつてよい。

もつとも、あくまで古典文学研究者の同人誌だった「文藝文化」は雑誌「日本浪漫派」に比べれば影響の範囲は限られていたし、文学者だった保田與重郎に対して国文学研究者だった蓮田善明は論の対象になりにくいこともたしかだ。しかも蓮田の古典研究はいわゆる実証よりも独自の文学史ヴィジョンを闡明することを第一義としていて、そのヴィジョンには「皇国史観」と不可分な一面があったから、国文学研究の業界では今さら蓮田善明を回顧する必要などないのかもしれない。つまり、蓮田善明は禁忌であるがゆえに忌避されているのではなく、たんに無視され忘却されているだけかもしれない。

だが、蓮田の古典論のヴィジョンは折口信夫などを經由した国学の系譜を踏まえたものであって、それはそのまま、三島由紀夫の『日本文学小史』のヴィジョンへと直結している。折口や三島のヴィジョンが検討に値するなら蓮田のヴィジョンも独立した検討に値するはずだろう。

思いついて手元の『増補改訂新潮日本文学辞典』（一九八八年）を開いてみても蓮田善明の項目はない。索引にもない。「文藝文化」の項目もない。たしかに蓮田善明は忘却され無視されているのだ。古代から現代までを一巻に収めた辞典なので無理はいえないが、蓮田の項のあるべき場所の近くに「芳賀檀」などという名前があるのを見ると、その不当な扱いに異を唱えたくもなる。もとより私は蓮田善明とは思想も文学観も異なる者だが、同じ日本語による文学に携わる一人として、この現状には義憤めいた思いすら覚えるのである。

そもそも、蓮田善明を「文学者」と区別された「国文学研究者」という枠に押し込めることが間違っている。蓮田の古典研究はそのまま蓮田の述志であった。詩は志を述ぶるなり、というときのその「詩」であった。その意味で、むしろ、『蓮田善明とその死』への序文を「文人」の一語から書き出した三島由紀夫に倣って、「文人」と呼ぶのがふさわしい。そして、大久保典夫『「文藝文化」の位置』（復刻版「文藝文化」別冊付録所収）

蓮田善明年譜

明治三十七（一九〇四）年

七月二十八日、熊本県鹿本郡植木町の金蓮寺（浄土真宗大谷派本願寺末寺）に、住職、慈善の三男として生れる。母はフジ。上に二兄・二姉があつた。

大正六（一九一七）年 十三歳

三月、植木尋常小学校を卒業。四月、熊本県立中学済々黶に入学。

大正七（一九一八）年 十四歳

九月から翌年三月まで、肋膜炎のため休学。

大正十二（一九二三）年 十九歳

三月、済々黶を卒業。四月、広島高等師範学校文科第一部（国語漢文専攻）に入学、斎藤清衛教授から強い感化を受ける。在学中、文芸部理事として校友会誌を編集、自らも小説・詩・評論を発表して文名を高めた。

昭和二（一九二七）年 二十三歳

三月、広島高師を卒業。四月一日、鹿児島歩兵第四十五連隊に幹部候補生として入隊。

昭和三（一九二八）年 二十四歳

一月三十一日、少尉に任官して除隊。四月、岐阜県立岐阜第二中学校へ赴任。六月、郷里植木町の医家の長女・師井敏子と結婚。

昭和四（一九二九）年 二十五歳

四月、長野県立諏訪中学校へ転任。

昭和五（一九三〇）年 二十六歳

二月二十日、長男晶一生まれる。

昭和六（一九三一）年 二十七歳

* 九月、満州事変勃発。

昭和七（一九三二）年 二十八歳

三月、諏訪中学校を退職。四月、広島文理科大学国語国文学科に入学。

* 三月、満州国建国宣言。

昭和八（一九三三）年 二十九歳

九月、清水文雄、栗山理一、池田勉と共に研究紀要「国文学試論」第一輯を刊行。

* 三月、日本、国際連盟を脱退。

昭和九（一九三四）年 三十歳

三月、山頭火と出会う。十一月、『現代語訳古事記』（机上社）を刊行。

昭和十（一九三五）年 三十一歳

三月、広島文理科大を卒業。四月、台湾の台中商業学校へ赴任。

昭和十一（一九三六）年 三十二歳

一月二十三日、二男太二生まれる。八月、伊東静雄に出会い、互いに共感した。

* 二月、二・二六事件。

昭和十二（一九三七）年 三十三歳

* 五月、文部省『国体の本義』発行。七月七日、日中戦争勃発。

昭和十三（一九三八）年 三十四歳

二月一日、父慈善死去、八十八歳。四月、成城高等学校へ転任。居を東京都世田谷区に移す。まもなく清水、栗山、池田と「日本文学の会」を結成し、以後同人の紀要・雑誌・叢書の発行はすべてここ

井口時男（いぐち・ときお）

文芸評論家。1953（昭和28）年新潟県生まれ。東北大学文学部卒業。1983年、中上健次論「物語の身体」で群像新人文学賞評論部門受賞。東京工業大学助教授、のち教授。1994年『悪文の初志』平林たい子文学賞受賞、1997年『柳田国男と近代文学』伊藤整文学賞受賞。著書『物語論／破局論』（論創社）『悪文の初志』（講談社）『柳田国男と近代文学』（講談社）『批評の誕生／批評の死』（講談社）『危機と闘争 大江健三郎と中上健次』（作品社）『暴力的な現在』（作品社）『少年殺人者考』（講談社）『永山則夫の罪と罰』（コールサック社）『天來の獨樂』（句集、深夜叢書社）『をどり字』（句集、深夜叢書社）など。

蓮田善明 戦争と文学

2019年1月20日 初版第1刷印刷

2019年1月30日 初版第1刷発行

著者 井口時男

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1746-0 © Tokyo Iguchi 2019, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。